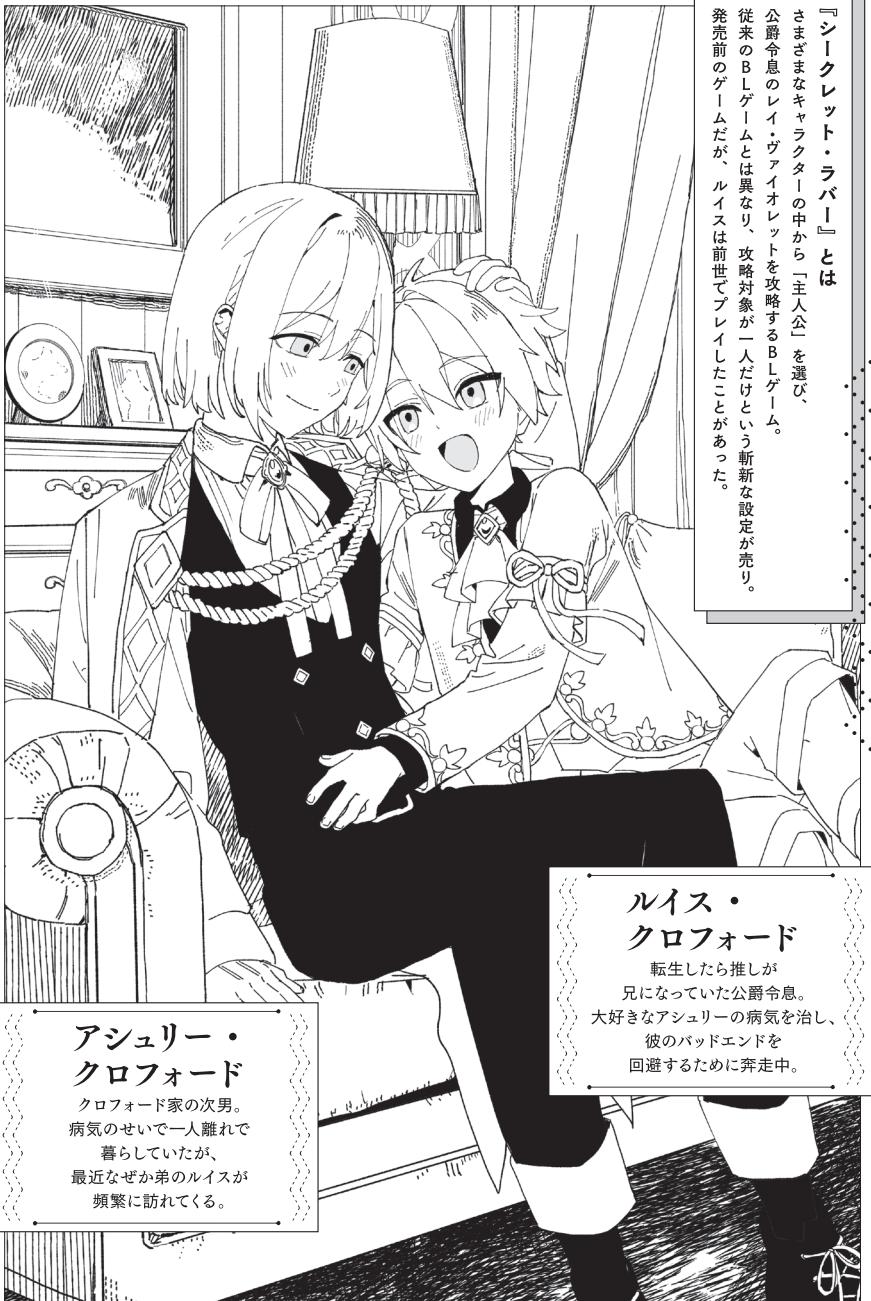


病弱な悪役令息兄様のバツドエンドは
僕が全力で回避します！

『シークレット・ラバー』とは

さまざまなキャラクターの中から「主人公」を選び、
公爵令息のレイ・ヴァイオレットを攻略するBシュゲーム。
従来のBシュゲームとは異なり、攻略対象が一人だけという斬新な設定が売り。

発売前のゲームだが、ルイスは前世でプレイしたことがあった。



目 次

病弱な悪役令息兄様のバッドエンドは
僕が全力で回避します！

クロフォード公爵家のサンクス・マーケット

病弱な悪役令息兄様のバツドエンドは
僕が全力で回避します！

プロローグ

「ルイス！ 危ないぞ！ 早く降りてこい！」

焦ったような兄の声が響く。木の下では長兄のジェシーだけではなく、使用人が何人もおろおろと見上げている。

(みんな心配性なんだから。たかが木登りぐらい好きにさせてほしいよ)

呆れたようにため息を吐いた後、ルイスは笑顔で大きく両手を振ってみせた。脚はまたがつている幹にしつかり巻き付けているし、この木に登るのは初めてではない。安全に決まっている。

「ジェシー兄様！ それにみんなも大丈夫だから心配しないで!! 僕、木登りは得意——」

そのはずだつたのに。

「え？」

またがつていた幹が突然、ボキッと嫌な音を立てて折れた。

瞬間に手を伸ばすが、掴んだ小枝も簡単に折れてしまう。

(やばい、落ちちゃう！)

この高さで背中から落ちたら、相当なケガを負うか、下手したら即死だ。



(今日のティータイム、僕の大好きなフィナンシェが出るつて聞いてたのに。食べたかったな)
そう思つたのを最後にルイスは意識を手放した。

「ねえ貴人、今ちよつといい？」

「呼び捨てすんなよ、お兄ちゃんだろ」

莉奈は俺の小言をスルーするとテーブルにゲームソフトらしきものを置いた。

「なんだこれ。ゲームか」

「そう。うちの会社から次に出す予定の新作なんだけど、社外の人の意見が聞きたくて。貴人なら話しても大丈夫つてボスからも了解どつてきたし。またやってみてくれない?」

趣味ゲーム、特技ゲームの俺はたまに妹の会社が制作しているゲームの試しプレイに協力していた。

「見返りは？」

「向こう一週間、家事は私がやる」

「短い」

「じやあ……一週間」

「のつた」

「ありがと、めっちゃ助かる！ できれば一週間くらいでクリアしてほしいの。来月、会議があるから、それに間に合わせたくて。こつちは設定資料ね……あ、やだもうこんな時間！ 行ってきます！」

妹はバッグを引っ掴むと慌ただしく家を出ていく。

俺はその背中を見送りながら、いつも以上に丁寧にコーヒーを淹れた。

部屋中に広がるゲイシャ特有の花のような香りを肺いっぱいに吸い込みながら、ゲームの設定資料を手に取る。

今日は休日だが外出の予定はない。

というか休日も自主的にオンライン待機をしているので、外に出ることはめったにない。

リビングから見える広い道路の向こう側には、医大を卒業してからずっと勤務している大学病院がある。

入院患者にはいつ何が起きるかわからない。

いつでも駆けつけることができるよう、自宅は勤務先から徒歩五分のタワマンを購入した。

ちなみに、この生活に不満を感じたことはない。

もともとアルコールが得意でない俺にとっては、うまいコーヒーを飲みながら家でゲームをしているだけでも十分なストレス発散になるのである。

「BLゲームねえ……ま、やってみるか」

コーヒーと資料を手に、さっそくプレイする。

ゲームのタイトルは『シーケレット・ラバー』。

プレイヤーはさまざまなキャラクターから主人公を選び、「レイ・ヴァイオレット」という公爵令息を攻略するというBLゲームだ。

攻略対象が一人だけというのは斬新な設定である。

BLゲームは特に好きではなかったはずが、自分で驚くほど夢中になってしまった。その結果、一週間もしないうちにほぼ完全攻略した。

「終わったぞ」

「え!? 早くない!? 仕事ちゃんとしてんの？」

莉奈が目を丸くして叫ぶ。

「俺はおまえと違つて時間の使い方がうまいの」

「あつそ。で、どうだつた？ おもしろかつた？」

「ああ。攻略対象が一人で主人公がたくさんいて選べるのが新しくてよかつた。ストーリーもキャラごとによく練られてるし、主人公によつて引き出されるレイの表情とか感情が違うのも見ごたえあるし」

「その感想、めっちゃ嬉しい！ 推し、できた？ ちなみに今のところ社内の一一番人気はルークなんだよね」

「王道の主人公キャラだもんな、わかる。けど俺はアシュリーが一番好きだわ」

「え!? 悪役じゃん、なんで!?」

「バカおまえ、アシュリーのことを簡単に悪役なんて言うな」

俺の推しであるアシュリー・クロフォードはレイの婚約者で、主人公キャラの一人ではなく、このゲーム随一の悪役令息だ。

銀髪にすみれ色の瞳、切れ長の目が印象的なビスクドールのような美貌の持ち主だが、常に顔を纏めている様子がいかにも悪役っぽい。

ゲームではどのルートでも主人公とレイの邪魔をして、隙あらば主人公をいじめる徹底的に嫌な奴として描かれているのだが。

「シンプルにビジュアルがかなり好みってのもあるけど、設定資料を読んだら印象が変わった。この裏設定、かわいそうすぎる」

ゲームでは明かされていないが、アシュリーは体が弱い。

さらに顔と手足を除く体のあちこちに激しいかゆみを伴う原因不明の湿疹しつしんができるて、常に体調が悪かった。

だがごく親しい周囲の人間以外には病気を隠していたため、レイの目にはいつも不機嫌でわがままな婚約者としか映らなかつたのだ。

「もし俺がアシュリーの近くにいられたら、絶対こんな結末にさせずに守つてやるのに」

設定資料には兄と弟がいると記されていたが、アシュリーのあの様子じや兄弟仲はよくないのだろう。

ちなみにクロフォード家はアシュリーが断罪された際に一緒に処分を受け、王都から離れた辺境の地に領地替えされてしまう。

「なるほどねー。悪役令嬢とか令息ものつて流行つてるし、スピノフでアシュリーが主役もありか……つて無理だね、どのルートでも死んじゅうもん」

「だったらアシュリーも主人公キャラにしてくれよな。また今度ゆっくり話そーザ。そろそろ行くわ」

徹夜明けの妹に見送られて家を出る。

今日は早い時間からオペが入つていて。歩きながらゲーム脳を仕事の脳に切り替えつつ、病院の前に立つ。

「つしゃ、今日も一日頑張るか」

だが一步踏み出した視界が突然、大型のトラックでいっぱいになる。

(マジかよ。この距離でぶつかつたら即死だぞ! 俺の人生、終わるの早くね!?)

もうだめだと思った瞬間、俺は反射的に目を閉じた。

◇◇◇

瞼の裏に強い光を感じて目を開けると、心配そないくつもの顔が俺を覗き込んでいた。
(この人たち、誰……どう見ても日本人じゃないよな)

そう思つた瞬間、頭の中に俺——三枝貴人のものではない、外国人らしき子どもの記憶が一気に広がる。

(誰だこれ……いや、これも俺……!?)

知らないはずの人生の情報が脳内に溢れていく。そのせいか頭が割れるように痛みだす。「う……ああっ!!」

頭を抱えてうずくまる俺に、誰かが声をかけてくる。

「ルイス！ どうしたの!? しつかりして！」

「誰か早く医者を呼ぶんだ！ ああルイス、すぐにお医者様が来るからね。大丈夫だ」(ルイスって俺のことだよな……そうだ、俺はルイス……ルイス・クロフォード……)頭の中のもう一つの記憶がどんどんクリアになっていく。

その結果、俺は高熱を出して一週間近く寝込んでしまつたのだつた。

第一章

熱が下がつた頃には記憶が落ち着き、自分の状況を理解できるようになつていた。今俺の名はルイス・クロフォード。

クロフォード公爵家の三男で、金髪に水色の目を持つ天真爛漫な九歳の少年である。三男といつても、俺はクロフォード公爵の後妻である母上の連れ子だ。

愛嬌のある性格と母上によく似た可愛らしい容姿のおかげで、両親はもちろん長兄のジェシーからも溺愛といつても過言ではないほど可愛がられている。

「ルイス、他に食べたいものはないか？ それともなにかお話でも読んであげようか」

その証拠に、今もベッド脇の椅子に座つたジェシーがあれこれと世話を焼いてくれている。

今日は両親が朝から用事で出かけているため、ジェシーが一日中、俺の側にいてくれることになつたのだ。

ダークブラウンの髪にガーネットの瞳を持つ整った顔立ちの好青年だが、大好きな鍛錬のしすぎでガタイがいい。こんがり焼けた肌とあいまつて、とても名門公爵家の令息には見えない。

ジェシーは現在二十歳で、もうすぐ王立騎士団の入団試験を受けることが決まっている。

本人の強い希望のもとに実現したのだが、試験に向けていつも以上に鍛錬しているらしい。いく

ら服を新調しても、すぐにサイズが合わなくなると母上が嘆いてる。

「大丈夫です。ありがとうございます」

ベッドテーブルには所せましと美しい飾り切りを施したフルーツが並んでいるし、正直言つて本は自分でも読めるし、そのほうがラクである。

それにジェシーや使用人の注意を無視して高い木に登つて落下したなんて、どう考へても俺の自業自得だ。

だがジェシーは自分が止めきれなかつたせいだとひどく後悔しているらしい。

「わかった。だがなんでも言つてくれよ。ルイスがケガしたのは俺のせいなんだから」

ジェシーはそう言うと俺の頭を優しく撫でる。

熱を出したのは二人分の人生の情報を脳が処理するためで、落下によるケガとは無関係だろう。

だがそんなことは俺以外、知る由もない。

そんなわけでケガによる高熱だと勘違いされているのだ。

とはい『落下の衝撃で前世の記憶が戻つたから熱が出た』なんて言えるわけがない。

(ジェシーには悪いけど仕方ないよな)

心中で謝りながらジェシーに微笑みかけた。

俺が転生したのはグラスマニア王国という中世ヨーロッパ風の生活様式を持つ異世界の国で、クロフォード公爵家はグラスマニアの貴族の中で十大名家と称される大貴族の一つである。

前世の記憶を取り戻した今、俺はおそらくジェシーよりもこの国や貴族、そしてクロフォード家

についての知識が豊富だと思う。
それはなぜか。

驚くことにこの世界は、俺が死ぬ直前までプレイしていた例のBLゲーム『シークレット・ラバー』の世界だつたから。

ジェシーもルイスも設定資料に名前だけ記載があつたのを覚えている。

そう、俺はなんと推しキャラの弟——母上の連れ子なので血は繋がつていないが——に転生してしまったのである。

しかし推しである次男のアシュリーは、一人だけ本邸ではなく庭園の隅に建てられた離れで生活しているため、まだ会えていない。

数年前、アシュリーは顔と手足を除く体中に激しいかゆみを伴う湿疹^{しつしん}が出る病気にかかつてしまつた。

高名な医師に見せても原因を特定できない。命に別状はなく、他人にうつらないであろうことはわかつたものの、それ以上のことは今に至るまで解明されていないのだ。

原因不明の病にかかつてしまつたアシュリーは、最初は本邸で静養していた。

だが彼は次第に心を閉ざし、心配する両親や俺たち兄弟との接触を避けるようになつてしまふ。そうしてついに両親に、自分だけ離れに部屋を移すことを自ら提案したのだ。

もちろん両親は猛反対した。

だが、アシュリーには一度言い出したら絶対に引かない頑固なところがある。

「言うことを聞いてくれるまで食事をとらない」と言い出し、三日目に両親が折れた。

医者からは「伝染性のある病気の可能性は低い」と言われたのだが、万が一家族にうつってしまつたと恐れていたのだ。

これも裏設定として資料に書かれていたことで、それを読んだときにはアシュリーの不器用すぎる優しさに涙が出そうになつた。

回復したら絶対に推しに会いにいくと決めていたのだが、正直、待ちきれない。

「ジェシー兄様、本当に僕のお願いをなんでも聞いてくれるのですか……？」

ジェシーは読んでいた本をサイドテーブルに放ると、ベッドに身を乗り出してくる。

「もちろんだ！ なんでも言つてくれ

「僕、アシュリー兄様にお会いしたいんです」

「ア、アシュリーに!?」

予想もしていなかつたのだろう、ジェシーは目と口を大きく開けて椅子からずり落ちそうになっている。

「そ……れは難しいんじやないか？ アイツはほとんど離れの部屋から出てこないし。俺もしばらく顔を見てないしなあ」

「ジェシー兄様、どうしてもダメなのですか？」

目を潤ませて上目遣いで長兄の顔を覗き込む。

ジェシーはウッと小さく呻いて右手で口元を覆つた。兄は俺の悲しそうな顔に弱い。

とどめとばかりに今度は肩を落として俯くと、ぎゅっと抱き寄せられた。

「わかつたわかつた！ このジェシー兄様に任せなさい！ すぐにアシュリーを連れてきてやるからな！」

「ありがとうございます！ 兄様大好きです！」

これでやつと推しと対面できる！

心からの笑顔を向けると、ジェシーは俺の弟が可愛すぎると大声で叫んだ。

(うわあ……これが本物のアシュリー……)

今、俺の目の前には前世の推しにして現世の義兄であるアシュリー・クロフォードが座っている。画面越しでしか会うことのなかつた推しが実在することに感動して、言葉が出てこない。

ルイスよりも三つ上だったから、誕生日前であれば十一歳のはず。

白く透き通るような肌に、銀糸のような髪。同じ色の長いまつげに覆われたすみれ色の瞳は、まるで宝石をはめこんだようにキラキラと輝いている。

まだ十一歳なのに完成された美貌に目を奪われてしまう。

俺が黙つたままじつと見続けているので、推しはチラチラと困ったような目で俺を見てはすぐ目を逸らすというのを繰り返している。

「ルイス？ どうした、黙り込んで。話があるんじゃないのか？ アシュリーはあまり長くはここにいられないぞ」

ジエシーの言葉でハツと我に返る。

「ごめんなさい、僕……久しぶりにお会いしたアシュリー兄様があまりにお綺麗で……見惚れてしましました」

素直な気持ちを口にすると、アシュリーがすみれ色の目を見開いて俺を見る。

真っ白だつた頬がじわじわと赤くなつていく。

「バ、バカなことを言わないでくれ。僕をからかっているんだろう」

わあ。推しが照れてる。可愛い。自分の顔が気持ち悪く緩むのを抑えることができない。

「からかってなんかないです！ アシュリー兄様にお会いできて本当に嬉しいのです。これからはもつとお会いしたいです！」

だがアシュリーは美しい顔を曇らせた。

「それは無理だ。僕は病気なんだから」

小さいがきつぱりとした声には拒絶が表れていて少し悲しい。

でも俺は、彼が心の奥底では一人で暮らすことを寂しく感じていることを知つてゐる。

「兄様の病気は人にうつるものではないと聞きました」

「そう言われてはいるけどね。本当のところはまだわからない」

アシュリーはそう言つて悲しそうに目を伏せた。

設定資料には確かに「アシュリーの病に伝染性はない」と書いてあつたし、元医者として、なんとなく彼の病気には心当たりがある。

治る可能性がある病気のせいで、推しが誤解されまくつた挙句に性格が歪んだまま死んでしまうなんて絶対に嫌だ！

憂いを含んだ表情もたまらないけれど、やつぱり推しにはいつも幸せでいてほしいと思うのがオタク心というもの。

ゲームではアシュリーの笑顔なんて一度も見たことがなかつたけれど、きっと天使のように可愛いいに違ひない。

俺はベッド脇の椅子に座るアシュリーの両手をぎゅっと握つた。

「アシュリー兄様！ 僕が絶対に、兄様のことを幸せにしますから!!」

アシュリーはぽかんとした表情を浮かべて俺を見た。推しに正面から近距離で見つめられて昇天しそうになる。

だがアシュリーは素早く俺の手から自分の手を抜くと立ち上がつた。

「バカげたことを言わないでくれ。きみはまだ熱があるんじゃないのか。もう少し休みなさい。兄上、僕は戻ります」

「わかった。確かに今日のルイスは妙なことばかり口走つてゐるな。それに、その……アシュリーだけじゃなくて、俺のこともう少し褒めてくれてもいいと思うんだが」

アシュリーは冷めた目でジエシーを一瞥すると、扉に向かつて歩いていく。

「アシュリー兄様！ 来てくださいありがとうございました。今度は僕が兄様のところに遊びに行きますね！」

背中に声をかけるが、推しは振り返らずに出ていった。

「つれない態度がちょっと寂しいが、どんな形であれ、二次元の推しとリアルに対面して会話できただなんて夢みたいだ。」

一人喜びを噛みしめていると、大きな手が優しく頭を撫でてくれた。

「アシユリ一は気難しいところがあるんだ。兄の俺ですらアイツが何を考えているのか、よくわからないことが多いし。ただ、悪い奴じゃないんだ。許してやつてくれないか」見当違いも甚だしいが、ここは大人しく頷いておく。それに推しと対はなは面して興奮したせいか、少し体温が上がった気がする。

「兄様、僕、少し休みますね。また熱が上がってきたかもしません」

「本當か!?」

ジェシーは慌てて俺の額に手を当てる。

「確かに少し熱いな。冷やすものを用意してくるから、横になつて待つておいで」

「はい」

ジェシーが部屋を出ていった後、俺は目を閉じてシーツに体を沈めた。

目を閉じると瞼の裏にキラキラのエフェクトがかかった推しの姿が鮮明に浮かんでくる。「リアルアシュリー……綺麗すぎ、天使すぎ。子ども時代があんなに可愛いなんて聞いてない。はあ……破壊力ハンパなかつたな。手、あつたかかつたし……」

推しに会えた喜びを存分に噛みしめた後、気になつたことを思い返してみる。

初夏だというのに、アシユリ一は真っ黒な長袖のシャツをきつちり着込み、顔や手以外の皮膚はほとんど見えないようにしていた。

俺の見立てが正しければ、アシユリ一が医者から指導されている生活は間違いだらけで悪化する可能性しかない。

体は子どもになつてしまつたが、頭の中には前世の医学知識がしつかり残っている。まるでどこかの高校生探偵だ。これを活用しない手はない。

突然、もしかすると俺はアシユリ一の人生を変えるために、この世界に転生したのではないかという考えが浮かんだ。

「そうだ、きっとそうに違いない。」

これから絶対にアシユリ一の病気を治して、人生をバラ色にしてやる!!

そのためにも、まずは自分の体調を整えなければ。

近い将来、病気を治して元気になつたアシユリ一に、クッキーを「あーん」してもらうという、前世の自分の年齢を考えたら非常に氣色悪い妄想をしながら俺は眠りについたのだった。

早くまた推しに会いたい一心の俺は、気合いで四日後には体調を回復させた。今やすっかり元気になり、今日も朝から屋敷の内外を走り回っている。

「……また来たのか。困った子だ」

アシユリ一は警戒心と困惑の混ざった目で俺を見下ろす。

体調が回復した日からもう一週間以上も離れに通い詰めているので、この目にももう慣れっこだ。

俺は気にせず微笑みかける。

「えへへ。だつて今日も兄様に会いたかったんです」

「僕に？……なぜ？」

「そんなの、決まつてます！兄様のことが大好きだからですっ!!」

アシュリーは小さくため息を吐いて片手でこめかみを揉んだ。

「つまらない冗談はやめなさい。ここはきみが来るべき場所じゃない。父上や母上、それに兄上が心配する」

「いえ！みんな僕からアシュリー兄様の様子を聞いて、とても喜んでいらっしゃいますよ」

ほんの一瞬、すみれ色の瞳に動搖が走った。

だが表情管理が完璧なアシュリーはすぐにいつもの厳しい顔に戻る。

「そうか、それはよかつた。だが僕はこの通り特に変わつたところはない。何かあれば執事長からすぐ連絡がいくはずだから、きみが毎日来てくれる必要はない」

「でも僕が毎日、兄様のお顔を見たいのです」

アシュリーはうんざりしたように息を吐いた。

「……ルイス。さっきも言つたばかりだろう。つまらない冗談は——」

「わあ！兄様が僕の名前を呼んでくださつた！昔みたいに!!兄様、もう一回お願ひします！」

なんという**きみこころ**僕伴。初めて推しに名前を呼ばれた。嬉しそうに体中の血が沸騰するように体が熱い。

アシュリーはしまつたという顔をした後、下唇を噛んだ。

そうして、「もう一度名前を呼んでほしい」としつこくねだる俺を無視し、生徒指導の教師のような口調でぴしやりと言ひ放つ。

「とにかくもう戻りなさい。それから、もうここには来ないよう。わかつたね」

「うーーん」

「なんだいその返事は。わかつたね？」

「うーーーん」

「いい加減にしなさい」

言葉は厳しいけれど、アシュリーの眉毛は八の字になつていて。

本当は怒つているのではない、ただ困つてゐるだけなのだろう。

聞き分けのない義弟を前に、アシュリーは次第に途方に暮れた表情になつていく。

「兄様は僕がお嫌いですか？」

俺の言葉に、すみれ色の目が揺れた。

「そういうことじやないんだよ。僕の病氣のことは知つてゐるだろう。もしきみにうつりでもした

ら——」

「大丈夫です。絶対にうつりませんから」

思わず被せるようにそう言ひ、アシュリーは眉を**ひそ**める。

「どうして断定できるんだ。お医者様は確率が低いと診断しただけで、うつる可能性がゼロだとほ

「言っていない」

「いえ。絶対に大丈夫ですから！」

「どうして……」

自信たっぷりに胸を張る俺に、アシュリーは戸惑いの表情を浮かべる。

「それにもし兄様がここには来てはいけないとおつしやるのでしたら、僕はもう食事をとりませんから！」

「そ、そんなことは絶対にだめだ！ ルイスが体を壊してしまってじゃないか」

「兄様、今日は二回も僕の名前を呼んでくれましたね。嬉しいです！」

満面の笑みで下から顔を覗き込む。アシュリーは少しの間ぽかんとした表情をしていたが、やがて小さくため息を吐いて、天井を仰いだ。

「……もういい、わかつた。僕の負けだ、好きにしなさい」

「わあ！ 本当ですか!! 嬉しいです!! 兄様ありがとう!!」

抱きつこうとジャンプすると、アシュリーは素早くかわした。

「来てもいいけれど、言いつけは守つてもらうよ。第一に、僕に触れてはいけない」

「えー。この前僕のお見舞いに来てくださったときは、手を握つたのに」

「きみが勝手に触れたんだろう。僕は許していない」

不満げに口をとがらせる俺を、アシュリーは軽く睨む。

「さつきも言つただろう。僕の病気はわからないことが多いんだ。触れてうつることがあるかもしないが漂つてきた。

「れない」

そんなことは百パーセントないのだが、ここで反論したら出禁になりかねない。

しぶしぶ頷くと、アシュリーはほんの少しだけ表情を緩めた。

それだけで嬉しそうにニヤついてしまう。

「ほら、そろそろ夕食の時間だろう。明日も来ていいから、早く帰りなさい」

「わかりました。兄様、また明日来ますね!!」

俺はメイドに手を引かれながら、名残惜しくて何度も振り返つては勢いよく手を振る。

何度もかに振り返つたとき、アシュリーはやれやれといった^て体で手を振り返してくれた。

（手の振り方、控えめで可愛いすぎるんですけど!!）

俺は心の中で喜びを噛みしめながら階段を下りた。玄関広間に降り立つたとき、食べ物のいい匂いが漂つてきた。

「どうか、兄様もこれから夕食なんだ」

独り言のつもりだったのだが、側に控えていたメイドが教えてくれる。

「そのようですね。アシュリー様は毎日、特別に作られた療養食を召し上がるがつてているそうですよ」

「療養食？」

「はい。旦那様と奥様が國中から最高級の食材を取り寄せていらっしゃるとか」

「……なんだ」

最高級の食材で作る療養食というのが引っかかる。

なんだか嫌な予感がして、俺は厨房に向かつて走りだした。

「ルイス様!? お待ちください!!」

背後からメイドの慌てた声が聞こえるが、俺は気にせず走り続ける。

厨房にたどり着くと、開け放された扉から室内をそつと覗いた。

中では数人の料理人が忙しく立ち働いていて、すでに出来上がった何品かは金色に輝くワゴンの上に載せられている。

俺はその料理を見て絶句した。

(嘘だろ。病人にあんなものを食べさせているのか!?)

真っ白く大きな皿の上には大ぶりにカットされたローストビーフが載っているが、その上にはところみと艶のあるグレイビーソースがかかつっていた。

さらに同じ皿にはたっぷりのマッシュポテトとヨークシャープディングが盛り付けられている。隣の大皿にはボイルした頭つきの大きなエビが鎮座しているし、厨房ではコロッケのような揚げ物の準備をしているのが見える。

逆に野菜やフルーツの類はほとんどない。

ローストビーフの皿をよく見ると、申し訳程度にクレソンに似た葉野菜が数本添えられているぐらいいだ。

確かにうまそうではある。

だがそれは俺のような健康体の人間にはだ。

ふいに料理人の一人が顔を上げる。

「これはこれはルイス様。本日もアシュリー様のお見舞いでどうか

「うん。ところで、これは兄様のお夕食なの?」

「はい。どれも旦那様と奥様が国中で一番高級なものを取り寄せていらつしやるのですよ」

「そうなんだ」

「アシュリー様には栄養たっぷりの料理を召し上がるがって、力をつけていただきたいと伺いませんか。ですがアシュリー様は食が細くて、いつもお残しになってしまわれて。もつとお口に合うものを作るために日々研究中です」

そう言うと料理人は持ち場に戻っていく。

この料理を見て、何年も一向に病気がよくならない理由がわかつた。

それどころか、このままではアシュリーの病気は悪化する一方だろう。

俺は拳を握りしめる。

だが両親や料理人たちが悪いのではない。彼らは知らないだけなのだ。

(この世界は前世と比べて、病気を治すための知識が発達していないのかもしれない……!)

魔法が存在するこの世界では、うまくいけばアシュリーの病気は前世より治しやすいはず。だが正しい知識がなければ、いくら環境が整っていても実行することはできない。

推しの病気を治すのに大事なのは、食事と運動、そして日光である。

砂糖やトランス脂肪酸、脂肪分の多いものをできるだけ控え、野菜や魚を食べることが必要な

のだ。

(よし！ なんとかしてアシュリーの食事を変えてやる！)

俺は心の中で叫び、決意を固めた。

翌日、俺は朝食の席で思いきつて推しの食事を作らせてほしいと申し出た。

「アシュリーの食事を作りたい……だつて？」

父上は間抜けな声で俺の言葉を繰り返す。

母上もジェシーもあっけにとられた様子でこっちを見ているが、そんなことは気にしない。

俺は元気よく、はい！

と返事をした。

「でもルイスはお料理なんでしたことないでしよう」

母上は困ったような顔で俺を見ている。

「大丈夫です！ 魔法もありますし、料理長の言うことはしっかりと守ります。メイドにも手伝って

もらうので、危ないことは絶対にしません」

この世界には魔法が存在する。

といつても、魔法を保有しているのは王侯貴族のみ。

魔力には火・金・土・風・水・木の六つの属性があるが、どの属性の魔力を持つて生まれてくるかは遺伝ではない。魔力の強さは基本的に爵位に準じるのだが、家柄に関係なく、強い魔力を持つ子どもが生まれることも稀にあるし、いくつかの属性を併せ持った子どもが生まれてくることも

ある。

ちなみに俺は風・水・木という三つの属性の強力な魔力を持っていた。

魔力が発現するのは一歳から二歳の間で、貴族の子どもたちがいたい三歳頃から魔力の扱い方を学びはじめる。

俺はまだ幼いとはいえ五年ほど魔法の勉強をしているから、魔法を使って料理をしてもケガをする危険は少ないはずだ。

「そうねえ。でも……あなたはまだ小さいし」

母上は父上を見る。父上は同意するように頷いていた。

この第一関門を突破できなければ何も始まらない。

俺は、さも名案を思いついたとばかりに弾んだ声を出した。

「そうだ、ジェシー兄様にもずっと見ていてもらいます。それならいいでしよう？」

「えッ!? 俺か!？」

突然巻き込まれたジェシーは自分を指差して叫んだ。

「いや……俺も料理なんてしたことはないんだが」

俺はジェシーに駆け寄ると、上目遣いで見上げた。

「ジェシー兄様、いいでしよう？ お願い。僕、兄様と一緒に料理してみたいですよ」

そう言いながら、ジェシーのシャツの裾をきゅつと握る。

頭上からうつと小さな呻き声が漏れたかと思うと、ダイニングに大声が響き渡る。

「もちろんだ！ このジェシー兄様に任せなさい！！」

「わあ、やつたあ！ ありがとう !! 兄様大好き !!」

大げさにびょんびょん飛び跳ねると、ジェシーに片手で素早く抱っこされてしまう。

「わはははは！ そうか大好きか !! だが俺のほうがもつと好きだぞ !!」

ジェシーはそう言つて、力強く頬ずりしてくる。

（チョロい兄貴でよかつたよ……）

俺は心の中でホツと息をついた。

父上の許しが出た翌日、俺はすぐさまアシュリーのいる離れへと足を運んだ。

「兄様！ 今日もお邪魔します!!」

アシュリーはこめかみを押さえている。

「……どうしてきみがここにいるのかな」

「父上と母上がお許しくださったので」

「僕は許していないけれど」

「でも！ 父上と母上はご許可くださいましたので!!」

冷たい瞳にも負けずに笑顔で返すと、アシュリーは大きなため息を吐いた。

「もういい、わかつたよ」

「アシュリー兄様、早くいただきましょう!!」

俺たちは今、離れのダイニングルームで席についている。

ちなみにジェシーは出来上がりの料理を見て、「俺には何もかも足りない！」といつものディナーを食べるため屋敷へ戻つていった。

長方形のテーブルの端と端に座っている俺たちの前に、色とりどりの野菜を載せた真っ白な皿が運ばれる。

アシュリーはやつと皿の上に視線を落とし、軽く目を見開く。

「今日はいつもと違う……」

その独り言を俺は聞き逃さず、さりげなくナイフとフォークを持つアシュリーを観察する。

数時間前、俺はジェシーを引き連れて一階の厨房にいた。

事前に説明されていたとはいえ、突然の俺たちの来訪に料理長はじめ料理人たちは戸惑いと怯えの混ざった表情をしていた。

「料理長、それに厨房のみんな。いつもアシュリー兄様のために素晴らしい食事を作ってくれてありがとうございます」

安心させるように、につり微笑むと彼らの表情が少しだけ緩む。

療養食の指示を守り、きちんと作っている彼らに罪はない。

「もう聞いていると思うけれど、今日は僕に兄様のお夕食作りをさせてほしいんだ」

その瞬間、料理長の顔が真っ青になる。

「や、やはり何か我々に落ち度が……」

「違うよ！ ただ僕が兄様のために何かしたいだけ!!」

料理長は曖昧に頷いて俺を見た。その目は不安に満ちている。

「……我々は何をすればいいのでしょうか？」

「これから僕が言う食材を持つてきてほしいんだ」

食材リストの紙を渡すと、料理長は目を丸くした。

「こ、これは……公爵家の皆様が召し上がるような食材とは思えませんが……」

「大丈夫！ お医者様から、薬にはならないが毒にもならないだろうから、今日だけならいいって許可をいただいたんだ。ねえジェシー兄様」

振り返ると両手を腰に当てたジェシーが大声で同意する。

「そうだぞ！ 医者にも問題ないと言われている。可愛いルイスのためにみんな、手伝ってくれ!!」

「兄様、もう少し声を小さくしてくださいますか？ アシュリー兄様に聞こえてしまします」

「そうか！ そうだな！ 気をつける!!」

「兄様、本当に静かにしていてくださいね」

軽く睨むとジェシーはウインクをして頷いた。

「任せてくれ！ それにしても、ルイスは睨んだ顔も可愛いなあ」

最後の一言は聞かなかつたことにして、俺は料理人たちが準備した食材をチェックして調理を始

めた。

数時間後、俺たちが作った料理がアシュリーの前に並んだ。

フォークとナイフを持ったまま、皿の中身を凝視しているアシュリーに声をかける。

「兄様、どうかなさつたのですか」

「あ、いや……なんでもない」

アシュリーはそう言つてサラダを口に運んだ。

本来はスープで始まるディナーだが、今日はなし。代わりにサラダをたっぷりと用意した。

インゲン豆、ブロッコリーなどの緑色の野菜に、ミニトマトやラディッシュ、ニンジンが彩りを添えている。

さらにスライスしたアーティチョークも盛り付けた。

ドレッシングはオリーブオイルと塩、それにあらびきの黒コショウを使つたシンプルなもの。

「……おいしい」

俺はアシュリーが呟いたのを聞き逃さなかつた。

しかも気づくと皿が空っぽになつてている。俺は心の中でガツツポーズをした。

ほどなくしてメインディッシュが運ばれてくる。

本日の一皿は、ひよこ豆とアサリのボワレに米を加えてリゾット風にしたもの。ローズマリーで風味づけをしたので、香りがすばらしい。

アシュリーはこれも気に入ってくれたようで、静かにゆつくりと、だが完食してくれた。

「今日のディナーはすべてお出ししましたので、この後は食後のお飲み物になります」

「もう終わりなの？」

「は、はい……やはりいつものようなお食事がよろしいでしようか」

恐る恐る尋ねた給仕係に、アシュリーは首を左右に振る。

「いや。正直に言つてこれぐらいの量がちょうどいい。それに料理も……。毎日ほとんど残してしまつて申し訳ないと思つていたんだ。いつも今日ぐらいの軽さと量だと僕は助かる」

給仕係は深々と頭を下げて、空になつた皿やカトラリーを片付けると、透明なガラスのティーカップをテーブルに置いた。

「これは……？」

「ハイビスカスとローズヒップのお茶でございます」

「綺麗な色だな」

アシュリーはガラスのティーカップを持ちあげ、鮮やかなルビー色を眺めてから口をつける。

「心地よい酸味で食後にぴったりだ」

いつも雪のように白い頬に少し赤みが差しているのがわかつて、嬉しくなる。

アシュリーの病気は、前世の乾癬かんせんという病気に症状がよく似ていた。

乾癬かんせんは原因が特定されているわけではないが、高脂質・高カロリーの食事で悪化するという見方もある。

だから彼の病気も、食生活の改善で症状が抑えられるのではないかと踏んだのだ。

「アシュリー兄様。今日のお夕食は、おいしかったですか？」

すべての器がテーブルから下げられたのを確認してから尋ねる。食事が終わるまで、目下の人間からは話しかけないのがマナーである。

「うん。おいしかった……だが、なぜそんなに嬉しそうなんだ」

ニヤニヤが止まらない俺にアシュリーは胡乱うろんな目を向けた。

「なんでもないです！ よかつたですね！ おいしくて」

「……まったく。よくわからない子だ」

頬が緩みっぱなしの俺を見て、アシュリーは困ったように少しだけ微笑んだ。

その日、夕食をアシュリーが残さず食べたことに感動した料理長は父上と医者に相談し、翌日からしばらくの間、あつさりした少なめの食事を試してみることになった。

食事の改善を始めてから二週間後、家庭教師と魔法の訓練をしていると、両親とジェシーが駆け込んできた。

「ルイス、アシュリーの病気が少しそくなつたぞ！」

「本ですか!?」

「ああ。今朝の診察で明らかに一部の湿疹じっしんが薄くなつていたそうだ」

いつも落ち着いている父上の声が弾んでいる。

「何年も変わらないどころかひどくなるばかりだったのに。本当によかつた」

母上は涙ぐんでいる。

「改善した原因ははつきりとはわかつていないが、生活の中でいつもと違つたのは食事だけだつた。それで、しばらくルイスが作つたようなメニューに変更することになつたよ」

父上のこんなに嬉しそうな顔は、初めて見たかもしれない。

「父上、またアシュリー兄様のお食事作りをお手伝いしてもよろしいでしょうか」

「もちろんだよ。ありがとう、ルイス」

（よかつた。やっぱり俺の読みは当たつていたみたいだ。早く治して推しのバッドエンドを回避してやる！）

心の中で意気込んでいると、大声が響く。

「すごいぞルイス！ さすが俺の弟だ!!」

ジェシーは猫を持ち上げるように俺の両脇に手を入れ、くるくる回りはじめた。

「ちよ、ジェシー兄様、目が回ります……」

遊園地のコーヒーカップかと思うほど高速回転させられて気分が悪くなつてくる。

「大丈夫だ！ 三半規管を鍛える訓練にもなるぞ!!」

ジェシーは豪快に笑いながらくるくると回り続け、やつと降ろしてくれたときにはしばらく真つすぐ歩けなかつた。三半規管の訓練つてなんだよ、まつたく。

翌日、俺は簡単なレシピをまとめた紙の束を持って離れの厨房を訪れた。

「ルイス様！ ようこそいらっしゃいました」

料理長が笑顔で駆け寄つてくる。

料理人たちの顔にも、先日のような戸惑いはない。

「あの日以来、アシュリー様が完食してくださいましたようになつたんです。毎日、ひと口も残さず……。ルイス様のおかげです」

料理長が一步前に出て、深々と頭を下げた。

「僕は本で読んだことをやつてみただけだもの。みんなが頑張つてくれたからだよ。だから今日はこれ、持つてきただん。よかつたらこのレシピを使ってみてくれないかな」

「こんなにたくさん……！ ありがとうございます!! 我々は元気になるためには豪華な食事が必要なのだと思っていました。お医者様の指示とはいえ、もつと自分たちで考えてみるべきでした」

真剣な眼差しから、料理長たちも推しの健康を心から願つていることがわかる。

「アシュリー様はお優しい方なのです。毎日、ほとんどの料理を残されておりましたが、そのたびに小さなメッセージカードをくださつていました」

料理長の後ろに立つていた料理人が、小さなクッキー缶を開けた。その中にはすみれの花が小さく描かれた白いカードがたくさん入つている。

料理人が俺に缶を差し出す。カードを一枚取つてみると、そこには流麗な文字で料理人たちへの感謝の言葉が書いてあつた。

『今日も残してしまつてごめん。食欲がなくてあまり食べられないのが本当に残念だけど、とてもおいしかつたよ』

「これ、アシュリー兄様が？」

料理人たちは笑顔で頷く。

「あの日は初めて、メッセージカードが添えられていました。それがどれだけ嬉しかつたことか。ひと口も残さず返ってきた食器よりも嬉しいものなんて、ありませんから」

彼らの潤む瞳を見ていると、アシュリーは愛されるべき人間なんだという想いが強くなる。（絶対に病気を治して、推しの人生を変えるんだ!!）

断罪されるアシュリーのスチルを思い出して、俺は拳を握りしめた。

「こんにちは！ アシュリー兄様!!」

今日も今日とて勢いよく部屋の扉を開けると、椅子に座っていたアシュリーが咎めるような眼差しをこつちに向けてくる。

「貴族がそんなに大騒ぎをするものじゃないよ。静かにしなさい」

「はい！ ごめんなさい」

「まったく……返事だけはいいんだから」

「へへ……」

俺はごまかすように笑いながら、許されているギリギリまで近寄っていく。

テーブルには分厚い本が何冊も置かれている。どうやらすべて農業に関わるものようだ。

「アシュリー兄様は農業にご興味があるのですか？」

「……まあ、昔から自然が好きだから。僕がこんなものを読んだってムダなことはわかつてゐるけどね」

アシュリーは小さくため息を吐いて目を伏せた。

「なぜです？」

「だって僕はヴァイオレット公爵家に嫁ぐことが決まっているだろう。名門公爵家の当主夫人になつたら、田舎暮らしなくてできるわけないよ。これは叶わない夢だ」

アシュリーは少し寂しそうに笑つた。その顔も優しくてエモいけれど、やっぱり推しの悲しそうな顔なんて見たたくない。

それにしても、推しにそんな夢があつたなんて知らなかつた。できるならその夢も叶えてあげたい。

「あの……アシュリー兄様はレイ様のことをお好きなんですか？」

推しを救うにあたり、どうしても聞いておきたかったことを尋ねると、アシュリーは左右に首を振つた。

「好きでも嫌いでもない……かな。もう長いことお会いしていないしね。でも、生まれた直後に決まった婚約だし、僕ら貴族の婚姻に恋愛感情は必要ないさ」

ゲームではアシュリーはレイのことが好きで仕方がない設定だつたが、どうやら違うようだ。この世界はもしかすると、俺が転生したことでゲームとは細部が変化しているのかもしれない。（今は特にレイに気持ちがないみたいだけど……この後に何かきつかけがあつて好きになることもあるかもしれないよな）

俺が黙つていると、アシュリーが気まずそうな表情になる。

「少しムダ話をしすぎたね。用事がないなら早く帰りなさい」

「イヤです！ 今日はアシュリー兄様とお庭を散歩するために来たんです。お散歩してくれるまで帰りません！」

「……僕は外には出ない」

冷たく言い放つアシュリーの鋭い目もかつこいい。にやけそうになるのを抑えなければ。

「でも、ずっとお部屋にいるのはつまらないでしょう？ たまにはお外に行きましょう！」

「あいにく僕は読書中だ」

「本を読むのはいつでもできるじゃないですか！ 今日は僕、兄様が一緒にお散歩してくださるまで帰りませんからっ！」

騒ぎながらアシュリーの座る椅子の周りをぐるぐると回る。

しばらく続いていると、アシュリーは観念したように大きく息を吐いて本を閉じた。

「もういい、わかった。わかったから止まりなさい。見ているほうが目が回ってしまうよ」「やつたあ!! アシュリー兄様、大好きです!!」

嬉しくてびょんびょんと飛び跳ねると、アシュリーの顔がうつすらと赤らんでいく。
「か、簡単に大好きなんて言うものじやない。きみの言葉は軽すぎる」

照れている姿も可愛くてたまらない。

「だつて本当に大好きなんですもの。行きましょう！ 兄様!!」

複雑な表情で静かに立ち上がりつたアシュリーの少し後ろを、俺は飛び跳ねながらしていく。アシュリーが階段を下りていくと使用人たちが目を見張った。
さすが名門貴族に仕えているだけあって、あからさまに騒いだりざわついたりすることはない。だが表情には少し驚きが表れている。

「アシュリー様、どうなさいました？」

執事長が慌てて駆け寄ってくる。

「アシュリー兄様は、これから僕とお散歩に行つてくださるんだ。お庭を一周してくるの」
俺が代わりに答えると執事長は目を丸くした。

「な……なんと！ 外に出られるのですか!?」

「二人だけじゃないから大丈夫だよ！」

俺は控えていたメイドのほうを振り返る。

執事長は少しだけ考えこんでいたが、やがて俺と推しにつっこり笑つた。

「それでは私もおともしましよう。よろしいでしようか」

「うん！ もちろんだよ。ね、兄様？」

アシュリーは洪々といった様子で頷いた。

クロフォード家の庭園はとても広く、美しい。

先々代の当主が著名なガーデンデザイナーに依頼して再設計したという庭園には、季節ごとに見事な花々が咲きみだれる。

社交界でもクロフォード公爵家の庭園は有名らしく、両親は季節ごとにたくさんの客を招いてガーデンパーティーを行っているのだ。

歩いて見回るだけでも楽しいのだが、今回、アシュリーを庭園の散歩に誘ったのには理由があつた。

(この病気は適度に日にあたることや運動することも有効なはずなんだよ)

ピンクやブルー、紫、白のさまざまな色の花で埋め尽くされた花壇は、時間を忘れて眺めていられるほど美しい。

さらに進むと見えてくる屋敷から少し離れたエリアには、素朴な野の花が植えられた草地もある。俺が前世で勤務していた病院にも、入院フロアには患者や病院で働く人間が楽しむための庭園が設置されていた。

小さな庭園ではあつたが季節ごとに咲くカラフルな花や草木は心を癒やし慰めてくれ、患者たちから人気だったことを思い出す。

無言で歩いているが、アシュリーの目元は少し綻んでいるように見える。

(本当に自然が好きなんだな。そんなところも推せる……ッ!!)

アシュリーはサブキャラということもあり、設定資料で好きなものまで触れられていなかつた。だがこうして側にいることで、推しの新たな一面を知ることができるのは嬉しい。

「うわっ！」

推しの顔ばかり見上げていたせいか足がもつれて転びそうになってしまった。
ぎゅっと目を閉じて訪れるはずの痛みを待ったが、いつまでたつても痛くない。

恐る恐る目を開けると、俺の体はアシュリーに抱きかかえられていた。

「ルイス！ 大丈夫かい!?」

美しいすみれ色の目が至近距離で俺の顔を心配そうに覗き込んでいる。

(眼福すぎる。アシュリーのこんな表情は初めて見た。ゲームのスチルじゃ子どものときの絵なんて全然なかつたし。最高かよ)

「ルイス……？」

状況を忘れて推しの顔に見惚れてしまつたが、アシュリーの戸惑うような声で我に返つた。

「だ、大丈夫です！ すみませんアシュリー兄様」

兄の手を離れて再び自力で立つ。

「申し訳ありません！ わたくしどもがついていながら」

後ろから駆け寄ってきたメイドが頭を下げる。

「ケガもしていないし謝る必要はないよ」

アシュリーの言葉を聞いて、メイドも執事長もホッとしたような顔になつた。

ゲームでは使用人たちに当たり散らす様子しか描かれていなかつただけに、優しい推しの姿を見られて心がほっこりする。

「ずいぶん歩きましたし、もうお屋敷に戻りましょうか」

執事長の言葉が合図になり、俺たちは来た道を戻りはじめた。

気をつけないと今度こそ転ぶかもしれない、注意深く地面を見ながら歩き出す。

子どもの手足は短く不安定なので、たまにふらついたり転んだりしてしまったのだ。

一步一歩、気をつけながら歩いているとふいに右手に違和感を覚える。

「……え？」

目線を横に向けると、俺の右手は誰かの手にしつかりと握られていた。

そのまま目線を上げ、俺は言葉を失った。

「しつかり前を見て歩きなさい。そうでないと、今度こそ転んでしまうよ」

アシュリーは前を向いたまま静かに言つた。耳が少しだけ赤くなっているように見えるのは気のせいだろうか。

（お、推しと手を繋いでいる。こんなことあつていいのか。やばい今日が命日では。ていうかもう一生右手洗えない）

嬉しくて思考回路が爆発しそうになる。俺は推しの少しだけ冷たい手をぎゅっと握り返す。

アシュリーは再び黙り込んでしまい、俺たちは一言も交わさず離れに戻つた。

けれど俺の心の中は表現できないほどの幸福感で満ちていたのだった。

アシュリーが食事を改善しはじめて半年が経過する頃には、過度な脂質を抑えた食生活と適度な運動と日光浴の甲斐あって、アシュリーの症状はかなり改善していた。

新しくできる湿疹はほとんどなく、痕もどんどん薄くなっている。

服装にも変化があり、今日はゆつたりした青と白のストライプのシャツの袖を両肘まで捲つている。

少し前まで、真っ黒の長袖ばかり着ていたのが嘘みたいだ。

「アシュリー兄様。今日は涼しくて風も気持ちいいですよ。お散歩に行きましょう」

周りをぴょんぴょん飛び跳ねて騒ぐと、アシュリーは困ったように笑つて本を閉じた。

その目は以前とは比較にならないほど、優しい光を湛えている。

わかつたから、少し落ち着いて。ちょうど僕もゼラニウムとラベンダーの様子を見にいきたかったんだ」

俺たちは今、両親の許可を得て庭の一角でハーブを育てており、それらを使って入浴剤や化粧水を作つてみようと話しているのだ。

「やつたあ!! アシュリー兄様大好き!!」

「はいはい。ほら、いい子にしていないと転んでしまうよ」

「はい」

立ち上がりつたアシュリーが差し伸べた手を、俺は迷うことなく握る。

以前よりもずっと温かい推しの手を握るのにも、やつと慣れてきた気がする。しかも柔らかい新しい匂いがする。

アシュリーに言つたら香水の匂いだと笑っていたが、それだけじゃないと思う。

アシュリー自身から漂う、いい匂いがあるのだ。

(うわ……思考が変態だな)

自分で自分をキモく感じてしまうことも多々あるが、推しとの幸せライフを満喫している。

とはいえ悩みや心配がまったくないわけではない。

アシュリーの病気はどんどん改善されてはいるが、完治というのは難しい。

いつたんは湿疹^{しつしん}が消失しても、食生活がもとに戻つたり、心に大きな負担がかかるような出来事があつたりすると、再発や悪化する可能性が高いのだ。

(なんとかして完治のための薬を作りたい……薬ができれば、同じ病気の人たちのためになるし、推しが幸せしかない人生を送れるはず!!)

そんなある日、俺はいつものように離れまで遊びにきていた。

「あれ？」

玄関ホールには父上の従者が立つてている。

(父上が来ているのかな)

俺はすぐには階段を上らず、一階の客間のほうへと進んだ。少しだけドアが開いている部屋の中

から、父上と誰かもう一人の人間の話し声が聞こえてくる。

「ルイス坊ちやま、立ち聞きはお行儀が悪いですよ」

困った顔をするメイドを笑顔で制し、気配を消してドアに近づいてみる。

「アシュリー様のご病気ですが、その後も改善が続いております」

「それはよかつた……！」ありがとう、クラウス医師

「いえいえ。ルイス様のご提案があつてこそその成果です。アシュリー様もルイス様には心を許していらっしゃるようで、雰囲気や表情もずいぶん変わられましたね」

「ああ。子どもたちがあんなに仲よくなつてくれるなんて思わなかつた。ルイスは母親に似て心の綺麗な子だし、アシュリーも昔のような笑顔を見せてくれるようになつてね」

「素晴らしいことです。あとはあの病気が完治さえできればなんの心配もなくなりますね」

「ああ。だがあの子の病気が完治する方法はないのだろう？」

「ずっとそう言っていたのですが……最近、隣国^{リビア}の親しい医師から不思議な話を聞いたのです。彼の患者にもアシュリー様と同じものと思われる病気の方がいたらしいのですが、ある花を煎じたお茶をひと月ほど飲み続けたところ、症状がすべて消えたと。それから一年が経つた今でも、またたく再発する気配がないらしいのです。もう完治と言つて差し支えない状態だと聞いています」

「そ、その花の名前は!?」

ガタツと音が聞こえ、父上の興奮した声が扉の外に漏れた。

父上と同じか、それ以上に俺の心臓も高鳴っている。

(待て待て……これはすごいことじゃねーカ！ もしかするとアシュリーの病気が完治するかもしないなんて)

俺は主治医の言葉を聞き逃さないよう、息を詰めて全神経を耳に集中させた。

その日の夜中、俺は本邸にある図書室へ忍び込み、『魔法薬草百科事典』を持ち出した。

部屋に戻るとベッドの上で早速ページを捲る。

主治医の話によると、隣国で病気を治したのはシャーベットリリーという花らしい。

花の名前を聞いた途端に父上の声から元気がなくなつたのを思い出す。

『シャーベットリリーだつて!? 幻の花じやないか。隣国ではどのようにして手に入れたんだろうか』

『それが、患者の家族が命がけで手に入れたとか……入手はできたものの、大変なケガを負つたと聞いています』

『やはりどの国でも、あの花を採取するのは難しいのだな』

『ええ、そのようです。我が国でも、アンブルサイドの森に生息すると聞いたことがあります』
『あそこは、魔獸だらけの国内で最も危険な場所だぞ。いくら金を積んでも請け負つてくれる者がいるかどうか……』

二人の会話を思い出しながら、シャーベットリリーのページを読み進めていく。

『魔法薬草百科事典』は魔力のこもつた特別なインクで書かれているため、挿絵の草花がまるでアニメーションのように動く。花が咲いたり再びつぼみに戻つたりして、挿絵を眺めているだけでもとてもおもしろい。

シャーベットリリーはこの大陸のわずか数か国でしか確認されていない希少な花だ。

険しい山奥や大きな森の中にひつそりと生息しており、満月の夜にだけ花を咲かせるという。

また花が咲いてから一時間以内に摘まないと、花の持つ効能は失われてしまうとも書いてある。さらに花を摘むことができるのは十五歳以下の純潔の少年少女のみ。

その上、雨が降つたり、条件に合わない人間が採取する前に触れたりすると、あつという間に枯れてしまうという。

(そりや入手困難になるわけだ)

俺は本を閉じてベッドに寝転んだ。

シャーベットリリーが咲く場所に魔力を持たない人間がたどり着くのは不可能に近いだろう。この世界では魔力を持つのは貴族のみ。

だが身分のある者たちが自分の子どもを危険に晒すわけがない。

よほど金に困っている家なら別だろうが、魔力の種類や強さによってはたどり着けない可能性が高いし、おそらく下級貴族では難しいだろう。それに山奥や森の中は魔獸がうようよしている。